



京都大学 総合人間学部 広報

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014「きく」

2014 年度募集要項.....	3
研究概要（申請書より）	
研究課題 1	
京都に“きく”観光と教育.....	4
研究課題 2	
学生と教員がお互いの声を「きく」Web 上ツールの開発.....	6
研究課題 3	
時間評価一人に聞く「あなたの中でどれだけの時間が過ぎましたか」—.....	8
学生研究プロジェクトのこと.....佐野 宏.....	10

新任の先生方より

学際的な環境にて.....船曳 康子.....	12
京都大学総合人間学部に着任して.....清水 扇丈.....	13
質問の思い出.....柴山 桂太.....	14
他者と出会い、創造的にすれ違うために.....岩谷 彩子.....	15
京大での講義を通じて.....山村 亜希.....	16
着任のご挨拶.....増井 正哉.....	17
さて、ここで何をしようかな?.....小松 直樹.....	18
着任にあたって.....西川 完途.....	19
より良い大気環境を目指して.....坂本 陽介.....	20
新任のご挨拶と教育・研究への意気込み.....山本 旭.....	21
研究のきっかけを得た京大生時代.....阪口 翔太.....	22

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014 「きく」

今号では、学際教育研究部と総人・人環活性化委員会による「総人・人環学生研究プロジェクト」2回目のテーマ「きく」を取り上げました。

一次審査、二次審査（2014年7月3日）を経て採択された3件の研究プロジェクトについては研究費が助成され、その研究成果は、2015年4月24日（木）の報告会にて発表されました。

それぞれの研究プロジェクトについて、申請書から活動の概要を示していただき、また総括として、総人・人環活性化委員会委員長の佐野 宏先生よりご寄稿いただきました。

2014年度 募集要項

2014年度研究テーマ：「きく」

聴く、効く、利く、菊、起句、規矩など自由

総合人間学部、人間・環境学研究科では、大学院生のアドバイザーのもと、2回生以上の学部生が代表者となり、提案するテーマについての意欲ある学生研究プロジェクトを助成します。日々の講義を受講するなかで身につけた視点や、研究の方法を使って、独創的な研究を行うことを期待します。新しい視点の創出や、研究方法の開発も含めて、自由に考え、自己批評を繰り返して結論を導いてください。研究結果の学術的意義は問いませんが、自分たちの研究成果を研究発表形式で報告してもらいます。

募集件数：3件

助成金額：1件あたり10万円（予定）を助成。物品費・消耗品費・旅費・講師招聘旅費・研究会会場利用料・人件費（謝金）等、ただし、懇親会費・飲食費は支出できない。

研究期間：平成26年7月1日～平成27年3月31日（研究成果報告会を平成27年4月中旬に行う）

研究代表者の応募資格：総合人間学部2回生以上

総合人間学部2回生以上を代表者とする3名以上10名以下の研究チームを組織すること。チーム構成員の学年・所属学部は問わないが、必ず1名以上人間・環境学研究科所属の大学院生をアドバイザーとすること。

大学院生を自力で見つけられない場合は、下記アドレスへ相談のこと。複数の研究チームに属して応募することは不可。

応募方法：研究チームの組織表、当該テーマに対する研究目的と意義、研究計画について別紙の様式にまとめて、下記アドレスに、PDFファイルもしくはWordファイルで提出のこと。この企画についての問い合わせも同じアドレスにして下さい。

E-mail: soujinkan.project@gmail.com

申請書様式は下記からダウンロードして下さい。

URL: <http://ganesha.phys.h.kyoto-u.ac.jp/project.html>

応募〆切：平成26年6月20日

主催：学際教育研究部、総人・人環活性化委員会

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014 「きく」 — 研究概要(申請書より)
研究課題 1

京都に“きく”観光と教育

代表者氏名：奈良美和子（文化環境学系 2 回生）
研究課題名：京都に“きく”観光と教育
研究期間：平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日
研究組織：
・奈良美和子（人間科学系 2 回生）
・中垣智晴（文化環境学系 2 回生）
・新井翔太（人間環境学研究科共生人間学専攻 M1）
※学年は申請当時のもの

研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

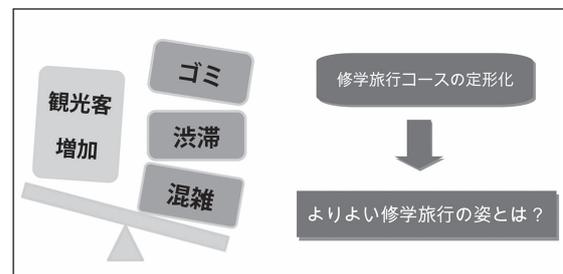
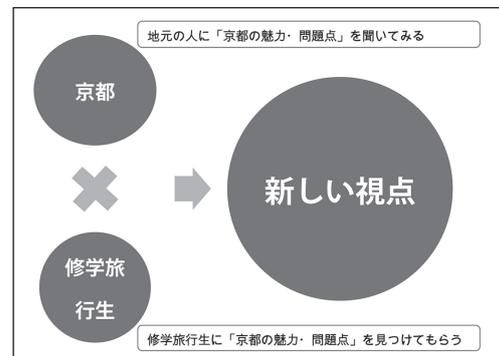
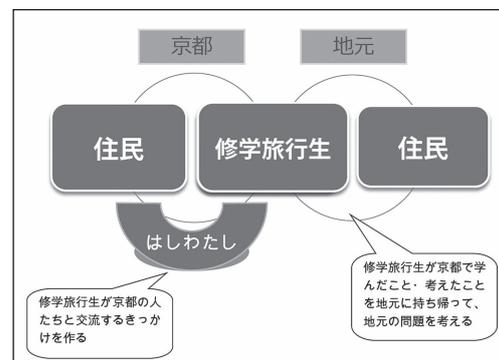
私は観光と教育についてもともと興味があり、講義などを通じてさまざまなことを学ぶにつれて、現状の京都の観光に対してある疑問を抱いた。通年にわたって多数の修学旅行生や一般の観光客が京都を訪れているが、そのうちのほとんどは清水寺や金閣寺などの有名な寺社仏閣のみを拝観しているように見える。そうした従来の形ではなく、もっと有意義な旅行の姿を提案することができるのではないだろうか。

また京都大学に入学し、実際に京都に住む側の人間となってから、修学旅行生をはじめとする観光客が大勢来ることへのとまどいも生じた。混雑やゴミの問題など、私にとって京都が観光地であったときには気づかなかった問題点が徐々に見えはじめ、観光客が増えることが京都に住む人々にとって必ずしもいいことではないのかもしれないと思うようになった。より地元の人々の理解を得るために、もっとできることがあるのではないだろうか。

これらの問題は決して無関係ではない。修学旅行生がただ教科書に載っている寺社のみを見るのではなく、例えば京都の混雑状況を実際に見て解決策をディスカッションしたり、町屋の保存問題を考えるために実際に町屋を訪れてみたりなど、新たな案はたくさんあると思う。それらは京都のためになるだけでなく、修学旅行生が持ち帰って、地元の問題の解決にもつながるだろう。これによって、京都の内側からは見えていなかった斬新な視点なども生まれるかもしれない。また、京都では当たり前だと思われていることでも、外側からだと模範に見えたり、逆に劣って見えたりするかもしれない。京都という場所はまだ見ぬ可能性を秘めている。

京都がこれからも観光地として発展していく上で、「観光地」としての京都と、「住むまち」としての京都

との共存を今こそ再考する必要があるのではないだろうか。もちろん、この研究結果をもとに、実際に行動に移すことを最終目標としている。それは京都市などの行政機関だけではなく、教育委員会などの教育機関も対象である。

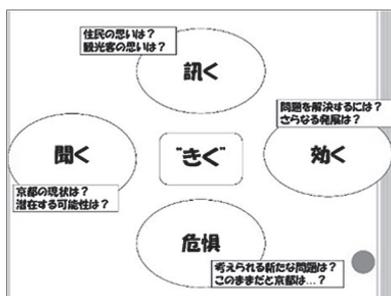


2) アピールしたい点

京都大学 COC 事業「COCOLO 域」※¹でも目標とされている「京都への恩返し」につながる。京都大学で学び研究した成果を外部に発信するこの上ない機会であり、研究を研究室内だけで終わらせるので

はなく、京都市庁や教育関係機関などにも提案することを視野に入れている。

また、従来の観光学や経済学の視点から京都を捉えるのではなく、観光と教育という新しい視点からアプローチする。京都に住んでいる人々や観光客に「訊く」、京都の現状や可能性を「聞く」、また、京都の今後の発展に「効く」、そして、この先京都が抱えるであろう問題への「危惧」。これらの「きく」を柱として、研究プロジェクトを進める。



(編集委員会注)

※¹ 京都大学 COC 事業「COCOLO 域」

「京都の各地域の課題を解決する」ことを目指した、京都大学による「大学 COC 事業」。京都の課題に、京都の人々と、京都大学の教職員・学生が取り組む、地域コラボレーション・プロジェクト。
<https://www.coc.kyoto-u.ac.jp/>

大学 COC (センター・オブ・コミュニティ) 事業

文部科学省が平成 27 年度から行っている事業。大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革などの取組を支援している。

研究の具体的な進め方

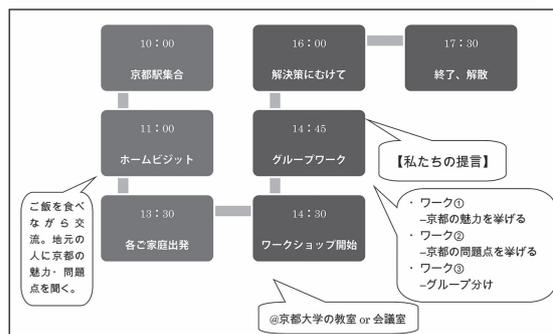
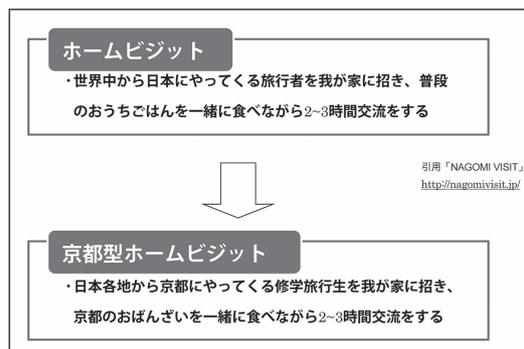
1. 現状を知る (7 月～10 月)

- ・京都でどのような観光・まちづくり教育がなされているのか
 → 市の教育委員会へ尋ねる、文献資料
- ・他の観光都市でどのような観光・まちづくり教育が行われているのか
 → 実際に他の都市へ行って確認する(例えば今年愛知県で行われる観光・まちづくり教育全国大会など)
- ・観光に対する行政の政策などはあるのか
 → 行政に尋ねる、文献資料
- ・観光客に対して住民がどのように感じているのか
 → 過去のアンケート調査などの利用、新しくアンケート調査を実施する

2. 考察する (9 月～12 月)

- ・京都で行われている観光政策・教育を見直し、改善策を考える
 → より相互作用的な案を考える

- ・他都市で行われている観光政策・教育を参考に京都での可能性を模索する
 → 他都市で成功を収めた事業などを京都で行った場合にどんな問題点が生じるか
- ・露呈した課題について解決策を探る
 → 他都市の事例なども参考に
- ・学部や大学の壁を超えて、さまざまな人の意見を聞く
 → 観光、教育、政策をはじめとする他分野から取り入れる



3. 実行する (10 月～3 月)

- ・考察を踏まえて、提案書を作成する
- ・提案書を行政機関に提出する
- ・モデルとしてのワークショップを開催する
- ・考察の段階で生まれた事業・イベントを開催する

4. 経費の使い道

- ・研究旅費 4 万円程度 (他の都市での実地研究、研究会参加など)
- ・講師招聘旅費 3 万円程度 (さまざまな人からの意見など)
- ・研究会参加費 1 万円程度 (観光・まちづくり教育全国大会など)
- ・文献資料購入費 1 万円程度 (観光、教育の専門書など)
- ・その他 1 万円程度 (消耗品など)

※ワークショップなどを実際に行う段階になれば、会場費なども計上される。

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014 「きく」 — 研究概要 (申請書より)
研究課題 2

学生と教員がお互いの声を「きく」Web 上ツールの開発

代表者氏名：藤井富秀（自然科学系 3 回生）
研究課題名：学生と教員がお互いの声を「きく」Web
上ツールの開発
研究期間：平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

研究組織：

- ・ 藤井富秀（自然科学系 3 回生）
- ・ 鷺 怒太郎（自然科学系 3 回生）
- ・ 大島七海（自然科学系 3 回生）
- ・ 田中綾椰（国際文明学系 3 回生）
- ・ 寺山 慧（人間環境学研究科共生人間学専攻 D2）

※学年は申請当時のもの

研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

私たち学部生 4 人はそれぞれがプログラミングの講義を取り受講する中で、初心者ながらも自分の頭でアルゴリズムを考える楽しさにぐいぐい引き込まれていきました。講義では様々なデータ処理の課題を通して基本的な関数の動かし方や組み合わせ方を学びましたが、いつしか講義の課題を超えて実際にプログラミングを応用し何らかのアプリを作成してみたいと思うようになりました。

そんな中、総人活性化委員会で先生方が「非公式な集まりの呼びかけをしたいが、クラスには掲示が難しいしポスターでは周知が行き渡らない」とおっしゃっているのを聞いたり、また、何人かの友人からは「もっと先生方と関わったり講義について意見を述べたりしてみたいが、どうにも心理的ハードルが高い」という声を耳にしたりすることがありました。そこでふと思ったのが、教員と学生がお互いに相互コミュニケーションができるツールないしはウェブサイトを自分たちで作ればいいのか、ということです。

学生教員間の相互交流を促すことで総人をうまく活用することのできる学生が増え、また、講義評価や学生の要望窓口を設け、教員側としても講義や学部自体に対する学生の意見に触れることで、新しい学びの場を学生とともに構築していくことに繋がることも大いに考えられます。また、学生と教員の間柄だけでなく、学生同士でも活発に読書会や勉強会を呼びかけられるような仕組みを作ることによって、「ともに学ぶ仲間を探しにくい」という学生の悩みの解消にも一役買うことが出来るかもしれません。

このように私たちの目指すところは何らかの現象の解明ではなく、総人を活性化させることのできるツールの研究開発を目的としております。そして、このツール開発によって、メンバーが後々自分の研究領域においてプログラミングスキルを一つの武器として使えることにも繋がるという副次的な効果もあつて考えています。

2) アピールしたい点

総人では 1 つの分野に進む学生が他学部には比べ少ないこともあつてか、先生方は親身に学生に取り合ってくださいます。この「学生教員間の距離の近さ」は総人を積極的に活用する学生としては本当に素晴らしい環境であると思いますが、教員とそれほど積極的に関わろうとしなければそれを知らないまま 4 年間を終えてしまうこととなります。一度先生方と仲良くなればその後は気軽に交流することは比較的容易ですが、やはりその「初めの一歩」を踏み出すことは多くの学生にとってはなかなか難しいことです。そういった時に教員をより身近に感じることでできるツールがあれば、これまでは心理的な距離を感じていた学生も先生方と気軽に交流をはかることができます。さらに、多彩な人がいるこの総人で他分野の人との

交流を通して、自分の分野における再発見やアイデアの広がりが生まれるかもしれません。相互コミュニケーションツールを通じて出会いの場が増えることによって、やがては総人全体が盛り上がっていくのではないかと考えています。

また、教育機関はその性質上、どうしても教員から学生へ一方通行の知識の伝達になってしまいます。大学の講義形式では学生は質問をしづらく、授業運営に関して言いたいことがあっても教員との距離感からなかなか意見をぶつけられません。トップダウン式の組織運営がこのごろ流行を見せていますが、今必要とされているのはむしろ草の根レベルでのボトムアップです。学生が講義へのフィードバックをする形で主体的に関わる気運が高まれば、学内における学問に対する雰囲気も少しずつ活気づいてくるかもしれません。

まさに転換期に来ているこの総人で、今一度人と人の繋がりに目を向け、新しい価値を創造できる場とともに構築していきませんか？

研究の具体的な進め方

7月～夏休み中

教育関連の SNS や他の教育機関におけるクラシス様の教育ツールについての調査をし、ツールの具体的な仕様及び方向性を固めていく。

Web プログラミング言語の独習本を人数分購入し、長期休暇を利用して各個人が最低限のスキルを身につける。

10月以降

長期休暇中に独習したプログラミングを振り返って、自分たちが作れそうなレベルの再確認をする。

定期的に学内の PC 環境に集まり相談しながら進めつつ、それぞれが学術情報メディアセンター及び自宅でプログラムを書く。

プロトタイプが完成すれば数人に体験してもらい、フィードバックをもらいながらさらなる開発を進める。完成後は広報活動をし、ユーザー数を増やすとともにアンケートを実施。

余力があればスマートフォン向けのアプリ版も開発す

る。

改善余地があれば研究期間終了後もバージョンアップを図る。

【10万円の使い道】

- ・ Web 関連書籍・プログラミング独習書籍の購入
- ・ サーバー管理費・回線費
- ・ サーバー用コンピュータ購入費

【活動のサマリー】

Web プログラミング言語 Ruby on Rails の原理やコーディング手法を学び、総人の学生と教員が利用できる SNS を開発した。勉強会・読書会・懇親会などの告知と参加登録ができるイベント募集機能や、総人の情報を発信する Article 機能を実装済み。今後も新機能やレイアウトなどを継続的に開発予定。

【開発した SNS の URL】

<https://stormy-depths-8563.herokuapp.com/>

【購入書籍】

- ・ 『たのしい Ruby』(ソフトバンククリエイティブ) 2,808 円 (4 冊)
 - ・ 『Ruby on Rails 4 アプリケーションプログラミング』(技術評論社) 3,780 円 (4 冊)
 - ・ 『できるクリエイター GIMP2.8 独習ナビ』(インプレスジャパン) 2,138 円 (4 冊)
 - ・ 『新標準 HTML5 & CSS3 辞典』(インプレスジャパン) 2,376 円
 - ・ 『現場でかならず使われている CSS デザインのメソッド』(エムディエヌコーポレーション) 3,024 円
 - ・ 『現場で役立つ CSS3 デザインパーツライブラリ』(エムディエヌコーポレーション) 3,024 円
 - ・ 『スマートフォンサイトデザインブック』(エムディエヌコーポレーション) 3,024 円
 - ・ 『スマートフォンサイト製作入門』(技術評論社) 2,570 円
 - ・ 『開発効率を UP する Git 逆引き入門』(シーアンドアール研究所) 2,376 円
- 計 51,298 円

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014「きく」—研究概要(申請書より)
研究課題 3

時間評価—一人に聞く「あなたの中でどれだけの時間が過ぎましたか」—

代表者氏名：山森実希（人間科学系 3 回生）
研究課題名：時間評価—一人に聞く「あなたの中でどれだけの時間が過ぎましたか」—
研究期間：平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

研究組織：

- ・ 山森実希（人間科学系 3 回生）
- ・ 伊藤篤希（人間科学系 3 回生）
- ・ 大沼慶寿（人間科学系 3 回生）
- ・ 山本文香（国際文明学系 3 回生）

※学年は申請当時のもの

研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

楽しいとき、私たちは時間を短く感じる。苦しいとき、私たちは時間を長く感じる。これらのことは感覚的には当たり前であるように思われる。しかし、意外とそのことを示すものは多くないようである。時間評価に関する論文を探してみても、確かに、動物を使用した時間知覚に関する実験や、何か作業を行う時間や何か提示されている時間を被験者に評価させた実験の類を見つけることはあったが、少なくとも日本語で書かれた論文においては、被験者が実際に感じている感情に関連している、数分にわたる時間評価を行った論文をあまり見つけることはできなかった。ここで、「被験者が実際に感じている感情」について、想定しているものを少し述べておく。今回のプロジェクトで行う実験でも取り扱いたい、「被験者が実際に感じている感情」とは、写真や映像などが提示され、もしも自分がその状況にあったら、あるいは、自分の目の前に写真や映像などで示されているものが実際にあったら、ということ等を想像して（あるいはその中に感情移入して）感じている感情ではなく、被験者自身がその情動を引き起こす状況下に実際に置かれて、そこで感じている感情のことである。例えば、蛇が目の前に実際にいるのと、蛇の写真が目の前にあるのとでは、感じる感情の種類としては同じ

かもしれないが、目の前に実際に蛇がいる方が蛇の存在が現実味を帯びていて、より嫌悪な感情を感じるのではないだろうか。心理学の実験で使われるのは、おそらくは刺激を統制するためであると考えられるが、写真や映像といったものである。しかし、想像等をすることによって、得た感情と、実際にその状況に置かれて感じた感情では何らかの違いがあるのではないか、という考えが自分の中にあり、それゆえに、被験者を自分の身に実際に何が起こる状況の下におき、何らかの感情を帯びた結果、主観的な時間がどのように変化するのか、ということを探っていた。

また、昨年、たくさんのお化け屋敷に入る機会があり、簡易にはあるが、個人的関心から、お化け屋敷に入った際に、どのように時間を感じているか、ということを探してみたことがあった。この時に感じたこととしては、恐怖・不安の状況下では、実際の時間よりも長く感じる傾向にあるのではないかと、いうことであった。ただ、対象がかなり少人数であったことや、恐怖を感じれば時間を長く感じるのではないかと、いう考えに影響されていた可能性など、多くの不備を抱えていたため、その結果が一般的なものであるとは言い難いものであった。ただ、お化け屋敷も実験を行う空間として利用できるのではないかと、いう手ごたえが得られた。

したがって、今回の学生研究プロジェクトでは、被験者が実際に感じている感情の度合いと時間評価の関係が可能であれば、お化け屋敷を使って、心理学的な手法を用いて調べ、主観的な時間と客観的な時間は本当にずれるのか、また、ずれるのであれば感情（恐怖）の度合いが大きくなるほど、そのずれは大きくなるのかということを探りたいと考えている。

また、それに加えて可能であれば、お化け屋敷の中に何がいった記憶に関する実験も行い、被験者がお化け屋敷の中を素通りしていないかどうかを確認する一方、記憶量と感情の度合いと時

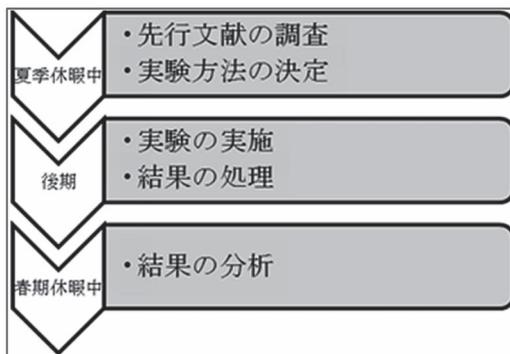
間評価のずれの関係も見たいと考えている。

2) アピールしたい点

そもそも、時間評価と作業記憶の関係について述べたものは多々あるが、時間評価と感情との関係について述べた研究は日本においてはそれほど多くないと考えられる。したがって、今回数分にわたる時間評価と感情の関係を調べることで自体が価値のあることであると考えられる。

また、先に述べたとおり、今回のプロジェクトにおいて、被験者にお化け屋敷に入ってもらい、その人自身が恐怖を感じた際にどれだけ主観的な時間がずれるか、ということを探りたいと考えている。バンジージャンプなどで実際に恐怖を感じた際の時間評価に関する研究はあるようだが、お化け屋敷における時間評価に関する研究は見つけられなかった。したがって、今回行おうとしている実験は、お化け屋敷を被験者に対する刺激として扱う唯一の実験であると考えられる。ただ、お化け屋敷に限らず、ではあるが、実際に何かが起こるなどして感じる感情を対象にすると、様々な感情を感じると考えられるため、今回の実験では感情の尺度を快か、不快かとしかできず、感情を一つに絞りきれないなど厳密な実験ができないと考えられる、という欠点もあるということをここで前もって述べておきたい。

研究の具体的な進め方



時間評価について、「時間評価の認知過程：作業記憶の役割」（篠原一光，1996）に実験方法等が簡単にまとめられているので、今回の申請書では、これを参考にします。実験方法としては、大まかには、被験者の通常時の主観的な時間（どのくらい時間が経ったと思うか）と客観的な時計の時間とのずれを調べ、その結果と不快な状況下（今回のプロジェクトでは、お化け屋敷を想定）における主観的な時間と客観的な時間とのずれを比較する。主観的な時間

の評価に使用しようと現在考えているのは、「言語評価」という、被験者が経験した時程の長さを時分秒といった常用単位で表現する方法である。また、実験者が設定・指定した状況において、実際に被験者がどのくらい不快に感じたか、ということも質問紙によって被験者に聞き、その不快度と、主観的な時間と客観的な時間のずれの大きさがどのように関係しているか、ということも調べる。もう一つ、可能であれば記憶実験も行い、例えば、お化け屋敷において、どのようなものがあったか、ということも質問紙で被験者に尋ね、その記憶量と主観的な時間と客観的な時間のずれ、あるいは記憶量と不快度がどのように関係しているのか、ということを探りたいと考えている。ただし、実験前にどの程度被験者に教示しておくかということもよく考えなければならない。例えば、時間評価課題を行うことや、他にも課題を与えることを先に述べることは、時間評価に影響を与えるようである。実験方法の細かい部分については、社会心理学や認知心理学等の先行研究を読みながら、8月・9月に決めていきたい。

また、今回遊園地の中にあるお化け屋敷を使用したいと考えているため、遊園地側と交渉を行い、お化け屋敷が閑散とする11月・12月あたりに、実験を実施したいと考えている。現在候補にあるのは、姫路手柄山遊園地のミラー・スリラー館である。この場所を挙げた理由は、中にあるものが固定されていて、被験者に与えられる刺激も一定のものとなると考えられるからである。また、この遊園地等の許可を得られなかった場合、毎年NFにてお化け屋敷を行っている、京都大学水泳部に実験への協力を依頼したいと考えているが、その了承も得られなかった場合は、社会心理学の先行研究などを参考にして不快な状況を作り出し、その中に被験者に入ってもらって同様の実験を行う予定である。実験が終わり次第、結果の処理・分析を行いたいと考えているため、それまでに統計について学ぶ予定である。

したがって、経費の使い道としては、被験者への交通費と報酬、あるいは施設へ入場してもらう場合には、その入場料あるいはその施設への謝礼に使用する予定である。

・参考文献

篠原一光、「時間評価の認知過程：作業記憶の役割」、『大阪大学人間科学部紀要』。vol.22 p.71-p.94, 1996

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2014「きく」

学生研究プロジェクトのこと

総人・人環活性化委員会委員長

佐野 宏 (国際文明学系)



学生研究プロジェクトは、総合人間学部の学生が自ら研究チームを組織して主体的に行う研究を支援するものである。募集は6月下旬に行われ、申請書類の一次審査を通過したチームが7月上旬に二次審査を公聴会形式で行う。二次審査は、来聴者全員の可否投票により、過半数の可を得たチームが採択される。採択されたチームには研究期間内に学際教育研究部から約10万円の予算が支給される。予算は会計担当の教員を窓口として支出する。応募に際しての要件は、研究チームの代表者が総合人間学部の2回生以上であること、アドバイザーとして人間・環境学研究科の院生が1人以上含まれていること。代表以外のメンバーに1回生が参加してもよいし、他学部の学生が含まれていてもかまわない。応募書類の書式は学術振興会などの科研申請書とほとんど同じものである。応募書類を作成するにも研究目的や方法、計画、予算の概算を事前にチーム内で議論しなくてはならない。院生を必ず1人含めることという要件は研究計画の立案に際しての全体像を俯瞰できる人物が必要との考えからである。

一次審査は書類審査である。総人・人環活性化小委員会で行う。委員会では申請書類の予算概要の適正、計画の実現可能性を協議はするが、しか

し、その学術的意義は一切問わない。一次審査ではその研究が「面白い」か否かを委員会で議論した上で決定している。一次審査を通過したチームは二次審査に進む。二次審査では申請チームがそれぞれに公開プレゼンテーションを行い、自分たちの研究目的とその概要を説明する。その場で来聴者に「面白い」か否かで判断を求め、採択の可否を投票してもらう。来聴者の過半数の可を得ることが採択の最低条件だが、最終的に得票数で上位3チームが採択される。

初めて募集をした2013年度には、数学の「美しさ」と芸術の「美しさ」の感じ方に共通性があるかと問いかけるもの、お化け屋敷について「怖さ」を求める人間のあり方を問いかけるもの、さらには総合人間学の実践としてポップ・ミュージックの本質に迫ろうとするものがあった。2014年度には、観光と教育について京都の価値を捉え直して新たな観光プランを提案しようとするもの、WebアプリのLINEやTwitterとは異なる連絡掲示板として新たなWebツールを開発しようとするもの、さらには、前年度のお化け屋敷の分析から発展して、怖さを体感している時間は長く感じるのか分析しようとするものがあった。いずれも非常に興味深い研究対象であり、総合人間学部で学んだ知識を活用し応用しようとする意欲に溢れている。

研究チームには大学側から共同研究室にあたる部屋の利用が研究期間内に限り認められる。最初

は自分たちの研究室という雰囲気の中、皆が集まって議論をし、いずれも順調に船出してゆくのだが、分析結果や調査が思うように進まない、何かともめごとが起こる。研究チーム内での意見対立や代表者と研究員の温度差が表面化し、研究員が途中から不参加になるケースがある。チーム研究では分担者のエフォートを考慮したチーム運営が代表者には求められる。さらに授業準備に加えてクラブ活動やアルバイトと研究の両立は負担が大きい。チームであることの難しさに直面するのである。あるチームではアドバイザーの院生が年長の相談役として代表者を精神的にもサポートしていた。こういったチーム研究にしばしば生じる問題は、話し合いで納得が形成される場合もあれば、研究計画の変更や研究員の離脱もある。研究員の離脱は代表者にとってはつらい出来事だが、それでも進めて行くことが求められる。

そして、約半年の研究期間を経て、翌年春に成果発表会が行われる。それぞれに研究した結果を発表してゆくのだが、二次審査での発表とは打って変わって、皆堂々としたものである。もちろん院生による指導があるとはいえ、自分たちで調査分析したという経験に裏打ちされた自信が、発する言葉に力を与えている。2014年度の成果発表では次のようなものがあった。たとえば、京都観光について修学旅行のあり方を再検討すべきだとの提案がなされた。町屋への民泊を含めた修学旅行の提案である。新たな Web ツールの開発を企図したチームは Web 上にそのアプリを作成して実演してみせた。LINE などでは過去の連絡事項と意見交換が同一画面であるためスクロールしないと再確認できないが、開発したアプリは掲示板機能をもつためワンクリックで掲示連絡の画面と意見交換の画面がスイッチできる仕様である。さらにお化け屋敷で恐怖を感じると時間感覚が通常よりもずれることについての分析は研究チームが人環

の教員に意見をもらうなどして独自に進め、実際に時間感覚がずれることを確かめた。楽しい時間はあっという間に過ぎるが、辛い時間はずいぶん長く感じるというのは事実だったのである。

審査基準は面白いかどうか、そして学術的意義を一切問わないというのは、何とも緩やかな基準である。いわゆる費用対効果を求める向きからすれば、どんな結論になるのか、成功するのか否かがまったくわからないものへの投資は避けられるのだろう。けれども、素朴に対象に向かうときの好奇心はそもそも既存の枠組みには収まらない。つまり結論が予測不可能だからこそ興味を持つ。掲げられた高い目標に対して実現可能性の困難を予想できる者からすれば、無知だからこそ描ける図面だと批判することはできるが、それは既存の知識をもはや捨て去ることのできない者の嫉妬でもある。その予測不可能な結論が、一方で待ち遠しく思われるからこそその嫉妬なのである。だからこそ、学生と教員のそれぞれにとって純粋に好奇心を駆り立てられること、すなわち「面白い」かどうかを採択の基準とした。

2015年度でこの学生研究プロジェクトは終了する。最終年度の今年採択されたのは、ベトナムで「ダーカウ」というスポーツが流行している文化的背景を探索しようという研究と、「総合人間学」の実社会での有効性を卒業生に取材して実態調査をして総合人間学の姿を描いてみようという研究の2件である。この成果発表会は2016年4月に予定されている。研究員の中には就職している者もいるはずだが成果発表はするとのことである。それぞれ、その研究成果はまったく予測不可能である。しかし、だからこそ実に「面白い」。

(さの ひろし)

新任の先生方より

学際的な環境にて

船曳 康子 (認知情報学系)



この度、認知情報学系、認知・行動科学に着任しました。

現在は、特に子どもの心や発達を専門としておりますが、もとは、平成8年に医学部を卒業した後、老年科に進んでおりました。臓器別に専門分化していった当時、全人的に診れる医師になりたいと志していました。多くの科をローテートした後は、認知症を専門としました。ものを忘れることを追求していくうちに、その前に覚える、学習する、があるはずで、その最初から研究をしようと考え、人の言語のモデルとされる小鳥の歌の祖というべき小西正一先生のおられるカリフォルニア工科大学(カルテック)の行動生物学教室に留学しました。カルテックでは、数学者、物理学者、心理学者など多岐にわたる科学者との純粋な学問的議論を繰り返し、そのキャンパスライフは、私にとって快適なものでした。3年半で帰国し、もう12年経ちますが、本学部の多分野を自由にまたぐキャンパスは、まさに、カルテックが懐かしく蘇ってくる感じがしております。ついでに、なぜか若返った気になります。

帰国後は、発達の基礎研究を人のところに生かしたいと、子どものころの分野に入り、同時に精神科医としてころの臨床を行いました。高齢者と子どもは離れているようで、実は似ている部分もあるように思います。さまざまな状況を目の当たりにしていくうちに、日に日に、社会的観点で考

えるようになり、研究の力でなんとかできないか、と思うようになりました。通常のやり方ではないかもしれないけれど、、、とにかく、今、この瞬間にもたくさんの人が困っておられ、直接はどうすることもできないことも多いのですが、ゆっくりしている場合ではないと認識しておりました。そうこうしているうちに、幸いにも、周りに人が増えてきまして、その分野をまたいだ考え方、知識、技術の斬新さに驚きながら、どんどん多忙となっていました。

ついに破綻しそうになった時、現職に就くことができ、病院での仕事は後任や若手の先生方へ、研究は学生や研究員の皆様へと、お任せやご一緒できるようになっていきました。日頃お世話になっている皆様に感謝を申し上げたいと思います。ただし、社会問題は山積みで、依然、たくさんの人が困っておられ、分野をまたいで、人とつながっていないとならない、とっておりましたら、ちょうど、総人での講義、全学講義という場がありました。将来、種々の場で活躍されることになる学生の方々に共通した認識を持って頂くことは、今後の社会の場における実務連携に肝要となると思っているのです。

これから、勉強を重ね、高度な専門性を身に付けたり、研究を進めたり、社会で活躍したりされていくと思います。その際に、分野をまたいでいるのに学問的な話が通じる知人は貴重に違いありません。このような学際的環境が備わった大学生活はそう多くはなく、その利点を生かしながら、将来を担っていかれることを願っております。

(ふなびき やすこ)

京都大学総合人間学部に着任して

清水 扇丈 (認知情報学系)



2015年4月1日付けで、静岡大学大学院理学研究科数学専攻から、京都大学総合人間学部・認知情報学系・数理情報論、大学院人間・環境学研究科・共生人間学専攻・数理科学講座・現象数理論分野に着任致しました。鴨川べりは4月には桜花

爛漫で、夏には涼を与えてくれます。近衛通から熊野神社を横目に帰途につく日々に、一千年の都京都に着任した喜びを噛みしめております。

私の専門は数学解析で、偏微分方程式の研究を行っております。特に流体の運動を記述する非線形方程式が対象です。流体は水のように体積が変わらない非圧縮性と、空気に代表される体積が伸縮する圧縮性の2つの状態に大別されますが、双方とも Navier-Stokes 方程式と呼ばれる基礎方程式に支配されます。Navier-Stokes 方程式は天気予報や新幹線の設計に至るまで広く諸科学に影響を与えていますが、数学的には未だ完全には解けていません。この方程式の可解性は次の千年に人類が挑戦すべき数学の7つの未解決問題のひとつとして100万ドルの懸賞金付きで提唱されています。私自身は、沸騰や凝固などの相転移を伴う2相自由境界問題に対して、解の時間局所・大域的適切性や、漸近挙動・安定性について研究しています。やや専門的に述べれば、流体の自由境界問題を記述する非線形偏微分方程式をバナッハ空間上の発展方程式と見なし、フーリエ解析・実解析・関数解析的手法を駆使して数学的に解明することに従事しています。

2015年の前期には、微分積分学を総合人間学部1回生に対して担当しました。大学の数学は、高校の数学に比べて証明が厳密に行われます。例えば、 $x=a$ で関数 $f(x)$ が連続であるということ、高校では $x \rightarrow a$ のとき $f(x) \rightarrow f(a)$ と学びました。一方大学では、任意の $\varepsilon > 0$ に対して、ある $\delta > 0$ が存在して、 $|x - a| < \delta$ ならば $|f(x) - f(a)| < \varepsilon$ であるとし、より厳密な定義を与えます。このような抽

象的な関数の連続性の定義を理解し、自由に使いこなせるためには、高校までとは異なる地道な訓練と高度な抽象的論理に対するセンスが要求されます。

ほぼ毎回演習問題を課し、次回の講義で提出するように授業を構成しましたが、演習書の模範解答の踏襲だけではなく、学生自身が考え抜いた独創的な解答が提出されていました。講義中や講義後の質問により、私自身も学生から多くを学び、互いの議論を通して学問的な理解が深まりました。総合人間学部1回生は、必ずしも自然科学を志す学生ばかりではありません。しかし微分積分学に対する履修生のレベルの高さを実感した就任直後の4か月でした。

前期試験が近づいた頃、ひとりの学生が質問にきました。その内容は具体的で実を射ており、拝見したノートからは十分意欲的に学習している様子が伺えました。そこで「数学は好きですか。4回生になったら数学を選択しますか。」と尋ねたところ、「フランス語とドイツ語に興味を持っています」と答えていました。恐らくは、文科系科目や第2外国語も数学と同様、意欲的に学習し、修得レベルは高いものと推測します。総合人間学部の人材養成目的のひとつに、既存の枠に捕われない分野横断的な新たな学問の構築を目指す学際性があると理解しています。それ故本学部では、各分野の世界最高水準の教養（リベラルアーツ）の講義を提供することにより、学生は自らの学問的興味・知的意欲に従ってそれらを統合し、将来従事する専門分野を切り開いて行くことが一つのミッションとなると存じます。このことは、何人かの学生との対話を通じて、多くの学生が十分に理解しているように思われます。私自身は、これまでの数理科学講座の大先輩方がされてこられたように、将来ノーベル賞受賞を期待できる優秀な学生たちに、微分積分学を中心とした世界トップレベルの数学的教養を提供し、同時に自らの流体数学の研究を続けていく所存です。どうか諸先生、諸先輩の方々のご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

(しみず せんじょう)

質問の思い出

柴山 桂太 (国際文明学系)



京大で講義していると、質問が多いことにいつも驚かされる。講義が終わるたびに学生が質問にやってくる。答えているうちに時間が過ぎてしまい、次の講義に遅れることもしばしばだ。

この文化は、いかにも京大特有のものと感じる。いや、正確には吉田南キャンパスに特有のものと言うべきか。私は学部は経済学部だったが、講義終わりに気軽に質問に行ける雰囲気ではなかった。学生と先生の距離が近い、旧教養部のフラットな文化が、質問をしやすくさせているのだろう。

私も学生の頃、何度か質問に行ったことがあった。中でも鮮明に覚えているものがある。

私が京都大学に入学したのは一九九三年。日本経済のバブルは崩壊し、いまに続く「失われた二〇年」がはじまった頃にあたる。しかし当時の社会には、まだバブルの余韻が残っていた。ほとんどの学生は講義には出席せず、思い思いのことをして四年間を過ごしていた。

私もそんな「ゆるい」学生の一人だったが、自分でもよく分からない知的飢餓感のようなものがあって、何かを勉強してみたかった。せっかく経済学部に入ったのだからと、経済学の専門講義に出てみたが、「経済学は稀少性の科学で云々」と少しも心に響かない。今にして思えば体系的で立派な講義だったのだろうが、右も左も分からない一学生には、経済学の定義から始められてもさっぱり理解できなかった。

次に教養科目の経済学基礎論に出てみた。担当は、この年に京大に赴任されたばかりの佐伯啓思先生だった。講義資料も持たず、ぶらっと教室に入ってきて「経済学のオーソドックスな理論では、経済の現実を捉えきれない」という話をされた。経済学を教えるのに、まずこの分野がどんな限界に

直面しているのかを説明することから始める。なるほど、これが大学の学問というものかと目が開かれる思いがした。一方で、これから学ぼうとしている経済学の無効をあらかじめ宣言されたようで、出鼻がくじかれた気もした。

そこで講義終わりに先生を追いかけて質問してみた。これから経済学を学ぼうと思ったが、先生のお話を伺うと、別のことをやるべきか迷う、と。振り返れば、なんとも子供じみた質問で恥じ入るばかりである。

先生の回答は「エイズが治らないからといって医学の研究をあきらめる人などいない、経済も同じことだ」という趣旨だったと記憶している。なるほど、そういうものかと思って、先生の授業だけは一年間、真面目に出席した。その後も総合人間学部のゼミに出させてもらうようになり、大学院は佐伯研究室の門を叩いた。そして今の私がある。

一回の質問で人生が変わった、と言えば大げさかもしれない。ただ、自分の中で行き場を失っていた、知的飢餓感に方向性を与えられたような気がしたのは確かだ。その後、私の関心は狭義の経済学を離れたが、探究心に火が付いた瞬間の原初の記憶だけは、旧A号館の正面玄関の夕暮れ時の風景とともに、忘れがたく残っている。

あれから二〇年で、今度は学生から質問を受ける側になった。そして因果は巡る。何を聞きたいのか自分でも要領を得ないまま、ただ講義で感じた「何か」に触発されて質問にやってくる学生を見ると、昔の自分もこうだったのかと気恥ずかしいやら、懐かしいやら複雑な気分になる。

大学改革で制度は変わり、建物も真新しくなった。だが、どんなに舞台装置が新しくなっても、大学の文化は変わらないし、変わるべきでもない。着任にあたり、その思いを強くする日々である。

(しばやま けいた)

他者と出会い、創造的にすれ違うために

岩谷 彩子 (文化環境学系)



2015年4月1日付で、総合人間学部・文化環境学系に准教授として着任しました。専門は文化人類学です。修士・博士と学んだ大学院人間・環境学研究科で、今度は教える側として、学部と大学院の教育にたずさわることになりました。あわただしくキャンパスを歩き来するなかで、ふとした瞬間にいつか体験したような感覚や感情がよみがえることがあります。そのようないつかすれ違った風景と日々出会い直しながら、私自身も成長を続けているのだらうと思います。優れた研究者と恵まれた研究環境に囲まれ、京都という新しいものと古いものが混じりあう美しい都市でふたたび生活できることに感謝する毎日です。

私の専門である文化人類学は、異なる環境で生活する人びとのもとにおもむくことで、自己が身を置く環境を問い直し、人類のあり方を考える学問です。その問いは、「いま、ここ」から離れた場所と、なじみの場所とを往還するなかで他者とすれ違うことから生まれます。私は、小さい頃から絵本や小説などでずっと気になってきた、ヨーロッパやインドで「ジプシー」と呼ばれる人びとのところに実際に足を運び、彼らの生き方を知ることによって現代社会や人類文化について考える研究を行っています。明確な「起源地」をもたない彼らは、行く先々でアウトサイダーとして厳しい差別や迫害に直面してきました。しかし、彼らはホスト社会におけるものや情報、サービスのニッチ（潜在需要）を満たし、異なる社会を媒介する生業に従事することで生き抜いています。たとえば、インドのヴァギリが媒介する廃棄物は異なる階層の人びとを結びつけ、グローバルなもの

環を生み出しています。インドのカールベリヤやヨーロッパのロマたちが見せる芸能は、異なるコミュニティに伝わる技芸の型を組み合わせたものです。人びとのリクエストに自在に応えるけれど、どこから来た誰なのかよくわからない存在であり続ける「ジプシー」—彼らが見せる柔軟な境界の設定と乗り越え、それにともなう苦難は、グローバル化時代を生きる私たちにもさまざまな示唆を与えてくれるものです。社会の「中心」や「安全なところ」にいるだけでは決して見えてこない風景は、人が生きるうえで必要不可欠なものありかを教えてくれます。

学生の皆さんにも、大学キャンパスにとどまらず、ぜひ異なる環境にみずから出向き、さまざまな出会いやすれ違いを体験していただきたいです。そのなかで、自分が一生探求してみたいもの、私たちが身を置く社会が必要としているものをつかみとる感覚が養われていくことと思います。同時に重要なのは、選びとった情報を厳選し確かなものにしていく見識や批判意識です。さまざまな情報を手にすることが簡便化している現代ですが、書物などを通して先人が積み重ねてきた豊かな智恵にじっくり触れ、それと格闘することでそのような見識は磨かれていきます。そうして私たちが今いる立ち位置を知ることが、新しいものを生み出していくうえでの出発点になるのだと思います。得られた方向感覚を信じて、ぜひ学生時代に大胆な一歩を踏み出して行ってほしいです。自己の立ち位置をふまえてさえいれば軌道修正はいくらでも可能ですし、その出会いが自分にとって重要なものであるならば、すれ違ってきてもまた出会い直すことになるはずで。私の講義もそのような出会いを提供し、現代を生きるための方向感覚を養う場になることを願っています。

(いわたに あやこ)

京大での講義を通じて

山村 亜希 (文化環境学系)



2015年4月に京大に着任し、早いもので、もう1年が経とうとしている。思い起こせば、4月には、山積みの360箱に及ぶ段ボールが一つも開封できていない状態で、前期の授業が始まった。それからは、毎日迫り来る授業を、自転車操業で走り切った。京大の授業は何が正解なのか、分からないままの疾走ながら、何とか一年目を終えることができそうだ。「授業で多忙」の真の意味を知った、この「濃い」一年は確かに苦しかった。しかし、今まで自分自身が気付かなかったことを、研究と教育の両面において、沢山教えてくれた。きっと後から振り返れば、今年自分の人生の一つの転期だったと思うに違いない。

今となれば、京都大学の一回生の時に受けた、足利健亮先生担当の全学共通科目「人文地理学」の授業で、私の人生の方向が決まったと言っても過言でない。先生の研究そのものを展開する、論理的かつクリエイティブな内容は、実に京大らしく、受講生を大学の知性に酔わせてくれる授業であった。何よりも、どこか遠い世界の物語だと思っていた歴史は、私たちの目の前の景観や地図に刻印されているとする視点は、目から鱗が落ちる思いであった。それが、「歴史地理学」であると知ったとき、自分が探求すべき学問が定まった。足利先生の授業が終わると、忘れないうちに、授業中のメモを元に、内容を完璧に清書した愛蔵版ノートを作った。背を綴る糸が切れかけた古いノートをみるたび、18歳の時に得た知的好奇心と学問世界への高揚感は、今でも鮮明に蘇る。

足利先生の授業以外にも、京大で受けた授業のうち、心に残っているものは、文学部の専門よりも、全学共通科目の方が多い。それらは、自分の研究に直接、役に立った訳ではない。しかし、それらの授業の先生方の研究者としての視点、思考、態度、姿勢には「夢」があり、学部生の私を京大という大学の知性に憧れさせるものだった。この一年、私が京大の授業に苦闘し、持てる力で全力を尽くした理由は、ここにある。かつての自分の

ような学生を前に、私は京大という場の夢と憧れを与えることができたのだろうか。これを母校愛と呼ぶなら、私はこれまでその存在に気付いていなかった。その自覚は、今年得られた財産の一つである。

研究に関して言うならば、自分の知的関心がしっかりと地理学の中に存在し、それが今の自分の基底をなしていることの発見も、今年の授業から得られた成果である。歴史地理学は、歴史学と地理学の両方にまたがる課題を扱う。とりわけ私は、歴史地理学では研究が不振な中世から近世初期を対象としていることもあって、近い研究者が歴史地理学内部に少なく、必然的に学際研究の渦中にいた。周囲からはニッチビジネスとして珍重される反面、地理学者としての確固たるアイデンティティを持っていないことに悩んだ。

しかし、京大において、地理学を専門としない多数の学生を対象とする授業を担当する中で、かえって自分の研究の「持ち味」を認識することができた。それは、地図から物事を深く読む読図力と、現実の景観から多くの事象を発見・推定する巡検力(フィールドワーク)、そして、地図と景観からその地域特有の「地の理(ことわり)」を見出したいとする志向である。素朴でアナログな頭と身体の動かし方を知っていること、地理学的想像力が豊かなこと、それに労力と時間を惜しまないことが、自分の「武器」だとは気付かなかった。この一年で、自分が地理学者であることを改めて認識でき、歴史地理学の魅力を伝えることの意味と必要性を痛感した。

4号館(かつてのE号館)で授業をしていると、建物の基本構造が変わっていないからか、そこで「人文地理学」を受けていたからか、過去の京大生の自分と現在の教壇に立っている自分とが、時間を超えて混ざるような奇妙な感覚に何度もとらわれた。もう10年余りも教壇に立つのに、大教室の講義では毎回足が震えた。このような喜怒哀楽のバロメーターが激しく振れる思いは、京大に来て初年度だけであろうか。京大と自分の緊張感あふれる対話は、今後も続いて欲しいような、それだと身が持たないので、早く安定した日々になってほしいような、複雑な思いである。

(やまむら あき)

着任のご挨拶

増井 正哉 (文化環境学系)



2015年4月に奈良女子大学から着任しました。1992年まで工学部建築学科で助手をしていましたので、23年ぶりの京都になります。学生時代から慣れ親しんだはずの吉田ですが、ずいぶんと様変わりをしていて、浦島

太郎状態です。なじみだったお店がなくなっているし、なにより町を歩く学生さんの数が少ない。夜の百万遍かいわいのさびしさには、すこし驚いています。

私の専門は、建築史・都市史をベースにした歴史遺産の保存・継承に関する研究です。個々の建物から歴史的町並み・遺跡まで、国内外をまたいで、かなり実践的にやってきました。いちばん時間とエネルギーをかけてきたのが、パキスタン・ガンダーラ遺跡の発掘調査と保存修復です。大学院生の時に京都大学中央アジア学術調査隊にいらしてもらい、発掘調査が終わった後に、ユネスコ事業でその遺跡の保存修復の責任者になりました。初めての訪パが1983年で、2008年まで25年かかっていたのが、調査から実際の保存修復、管理計画策定までを経験することができました。これが縁になってインドやネパールでの仕事がつづいています。国内では、町並み保存地区や史跡・名勝の文化財指定に関わる調査や指定後の保存管理のシステムづくりに関わっています。私の研究の出発点は建築史・都市史なのですが、実際の保存修復や保存管理活用計画づくりに関わっていくなかで、歴史遺産の再評価や保存管理の手法に関する、いわば計画論的な研究に力点がシフトしてきました。

私は1970年代後半から80年代前半を学生として京都で過ごしました。当時は、バブル経済の余波で次々と古い町家が失われていて、専門の立場

から「京都の町家は大事なんだ」と叫ぶことにそれなりに意味があり、実際に私もそういう趣旨の発信を続けていました。ところが今、様々な難しい条件はあるものの、あちらこちらで古い町家が住みつがれる例を目にすることができますし、いわゆる町家再生店舗もあまり珍しいものでなくなりました。歴史的景観を守る制度的仕組みについても、京都市は建物の高さを制限するダウンゾーニングを全国に先駆けて行いました。こうした動きは、全国に広がっていて、古い建物の保存・活用は、町づくりにおける当たり前のツールになってきていますし、景観保全の制度も整いつつあります。

こうした背景には、いわゆる世界遺産ブームに代表される歴史遺産に対する社会の意識変化があります。また、将来に残すべき歴史遺産の幅が急速にひろがってきました。産業遺産、文化的景観、無形文化遺産なども新しい考え方ですし、対象物の年代も近現代に広がりつつあります。歴史遺産に対する関心の高まりは、今や世界的な現象と言えます。

こうした歴史遺産を取り巻く変化は、たしかに好ましいものかもしれません。ただ、その変化があまりにも急なために、様々な歪みも見られます。積極的な保存・活用によってかえって本質的な価値が失われたりする例、地域社会のなかで遺産の意味が失われてしまう例など、私に関わった仕事でも、それぞれに何らかの課題が見えてきています。

歴史遺産の多面的な価値を正しく評価し、社会との関わりをなかで適切に活用・管理をはかっていく方法論が求められています。実際の事業を積み重ねながら、研究を進めて行きたいと思っています。新任とは言え、年齢的にはすでにロートルですが、気持ちだけはフレッシュにつとめていきます。どうぞ、よろしく願いいたします。

(ますい まさや)

さて、ここで何をしようかな？

小松 直樹 (自然科学系)



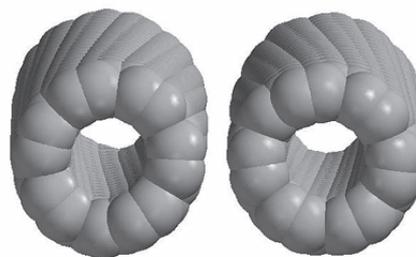
私の研究歴はかれこれ30年になるが、ここ京都大学人間・環境学研究科は私にとって7カ所目の研究場所になる。民間企業で勤務した経験を持ち、アメリカでも1年過ごし、長く地方大学も経験し、所属した部局も工、理から医と多岐にわたる。京都大学に限ってみても、ここ人間・環境学研究科は工学研究科、理学研究科に続く3カ所目の部局である。このような多様な経歴の中心には、常に京都大学がいる。どこにでていっても、磁石のように引き寄せられる。理学部の助手のときは、アメリカへの長期出張で戻るとは約束されていたが、工学研究科で修士課程を終え、企業に就職した時は、博士課程に戻るとは考えていなかったし、岡山大学や滋賀医科大学などの地方大学に移った時も、まさか、京都大学に戻るとは思っていなかった。不思議な縁を感じざるを得ない。

経歴が多様であれば、もちろん、研究内容も多様である。工学研究科での学生時代、そして約10年にわたる理学部、理学研究科での研究生生活の前半は、有機化合物の新しい合成反応に関して検討を行った。ある種パターン化された研究に飽きが増えて、機能的有機化合物に興味を持った。お椀の形状をした分子の構築に成功し、そのポケットに球形のフラーレンが丁度ハマった。同時に、私はホスト-ゲスト化学(超分子化学)にはまった。次に、フラーレンと同じナノ炭素材料で、筒状のカーボンナノチューブを対象とし、ホスト-ゲスト化学で形状の分離を試みた。京都大学理学研究科の最後は、たった一人で研究を行い本当に大変だったが、このプロジェクトが2002年に京都大学産学融合アライアンスに採択され、潮目が変わった。ポスドクが雇用できるようになり、研究が飛躍的に進展した。2003年に滋賀医科大学医学部に移った後、色々と試行錯誤したのち、キラルなホスト分子を用いてカーボンナノチューブの右巻き、

左巻き(下図)を分離した。この成果は、*Nature Nanotechnology*に掲載され、新聞社がやってきて取材も受け、幾つかの新聞にも取り上げられた。カーボンナノチューブが軌道に乗った頃、ナノダイヤモンドという私にとって第3のナノ炭素材料を扱い始めた。滋賀医科大学にきたころから、医学部という研究環境に合った新たな研究テーマを探していたので、無毒なナノダイヤモンドは生物医療応用に打って付けだった。その後、私自身の有機合成化学の学問背景を活かし、表面化学修飾によるナノダイヤモンドの機能化を行った。血液中でもよく溶けるナノダイヤモンドの作成に成功し、現在、滋賀医科大学と共同でドラッグキャリア、イメージングプローブとしての応用を検討している。ごく最近では、グラフェンの材料研究と生物医療応用も始めた。

私の研究分野は、有機化合物を扱う有機合成化学、超分子化学からナノ炭素材料を扱う材料化学、ナノサイエンスへと変遷してきた。完全にボトムアップの流れである。その流れに同期するように、基礎から応用へと少しずつシフトしてきた。ここ京都大学人間・環境学研究科では、当座、滋賀医科大学の研究テーマを継続して行こうが、この研究環境に合った新しいテーマを立ち上げようと模索しているところである。まず、研究室内の基礎研究と応用研究のバランスを整えるため、基礎研究にテーマを絞り、誰が聞いても“それ面白いね”と言ってもらえるような研究に挑戦したい。

(こまつ なおき)



カーボンナノチューブの右巻き、左巻き構造

着任にあたって

西川 完途 (自然科学系)



2015年4月1日付けで准教授として着任いたしました。本学農学部を卒業して人間・環境学研究科の修士課程に進学して以来、院生4年、助手6年、助教8年、すでに18年間も本研究科のお世話になっております。それ

どころか学部生の頃から、昨年度ご退職された松井正文先生の研究室に入出入りしていたので、20年間も人環棟とその周辺を徘徊していたことになります。研究室に所属してからの研究生活については、松井正文先生ご退職の際の小文に書かせていただいたので、この場では他のことについて書きたいと思います。

この20年間で特に変わったと感じるのは、大学構内のことです。多くの建物は建て替えられ、植栽や緑地も少なくなりました。昔は吉田南構内にもニホンミツバチの巣がありましたが、今はとても信じられません。このような変化は吉田南キャンパスだけではなく、例えば北部キャンパスでも、理学部の旧動物植物学教室の建物（現在の理学部2号館）は、かつては重厚なレンガ造りで木製扉の格調高い建築でした。今は現代的な建物に変わり、建物の間にあった大きな木々も全て伐採されてしまっています。

私の専門は動物系統分類学なのですが、例えば新種の生物を記載するときには、基準標本というものが必要になります。その種を代表する個体の標本で、永久的に保管しなければなりません。今年の春に、オランダのライデン市にある国立自然史博物館（現在の正式名称はナチュラリス）に行き、江戸時代にシーボルトが長崎の出島から持ち帰った標本の調査をしてきました。それらの標本の多くが、日本の動物の基準標本となっているために調査する必要があるためです。180年も前の標本ですが、現在も良好な状態で保存・管理されて

おり、とても驚かされました。この博物館は1820年に開館したので二世紀近い歴史があります。しかし、一般に公開されるようになったのは1990年からで、なんとそれまでの175年間は、基本的に研究施設としてのみ存在してきたのです。日本にも現在は多くの自然史博物館がありますが、ここまでの管理体制や研究の歴史はなく、入館者数をいかに増やすかに明け暮れています。

また、博物館から研究者用宿舎に帰る道すがらライデン市内を散歩すると、中世以来の建物が多く残されており、建て替えをすることはなく、外壁は補修して頑なに残して、内部には最新の空調や照明を取り入れています。また、植栽も夏の日除けになるように工夫されていて（冬は葉が落ちて日差しが部屋に入る）、これにも驚かされました。ライデン大学の植物園に行くと、シーボルトが持ち帰ったとされるイチヨウやケヤキが巨木に育ち、今も生きていました。

帰国して吉田南キャンパスの建物を見れば、まったく逆に外装のみの耐震工事がなされて昔の面影を失い、無機質な印象の建物がひしめき、かつて庭にあった木々はやっと大きく育ったのに、ほとんど切られて植え替えられています。日本は地震の多い国なので事情は違う面もあるかとは思いますが、何と申しますか、寂しいものを感じます。

私の研究分野でも、ものすごい速度で技術改革があり、研究テーマの流行り廃りもあります。着任にあたって今後の研究・教育活動について構想を練る機会がありましたが、考えてみれば昔からのテーマで未だに解決できていないものが、実は身近にあふれています。ライデンで見た建物のように、そういう古いものも大事にして、最新の技術や違う概念でそのテーマの中身を捉え直す、考え直す取り組みも重要であると思うようになりました。

(にしかわ かんと)

より良い大気環境を目指して

坂本 陽介 (自然科学系)



2015年3月1日付で、総合人間学部 自然科学系（人間・環境学研究科 相関環境学専攻 地球環境動態論分野）に助教として着任いたしました。私は京都大学工学研究科で修士号をとり、

その後他大学へと移りましたので、吉田キャンパスには約8年ぶりに足を踏み入れたこととなります。学生の頃は気づきませんでしたが、周りを自然に囲まれ、文化と歴史が色濃く残る街に立地していますので、研究に限らず、静かに思索を深めるのに良い場所だとあらためて感じております。

私の専門は大気化学です。我々は大気に囲まれて生活しておりますが、大気中の化学反応は多くの場合目に見えませんが、あまりピンとこない学問分野かもしれません。実際に大気の組成は99%以上が安定な化学種で構成されています。しかし、地球大気には大気中微量気体と呼ばれる体積比0.01%以下の様々なガス成分が存在しており、それらは日々化学反応を通じて大きく変化し、大気における物質循環や環境問題に大きく関わっています。

大気中にはガス成分だけでなく、直径が数ナノメートルから100マイクロメートル程度の大気エアロゾル粒子が存在しており、こちらも化学反応を通じてダイナミックに大気を循環していることが知られています。大気エアロゾル粒子は健康、環境、気象、気候への影響を持つことが指摘されていますが、その具体的な機構の理解は未だ不十分というのが現状です。

有機エアロゾル粒子は大気エアロゾル粒子の一種ですが人間活動や植物などを主な生成源としており、いわゆるPM2.5と呼ばれる2.5マイクロメー

トル以下の粒子の半分もしくはそれ以上を占めることが近年判明しています。有機エアロゾル粒子は大気中での化学反応を通じてその性質（組成、毒性、吸湿性など）を大きく変化させることが近年指摘されていますので、大気エアロゾル粒子の影響評価のためにその化学反応機構の理解が望まれています。私は目下の所、大気中でのオゾンの光分解により生成する強力な酸化剤であるHOxラジカルによる大気エアロゾル変質の反応速度定数を決定し、大気エアロゾル変質を定量的に評価することを目標としており、京都大学ではレーザー誘起蛍光法を用いた新たな大気エアロゾル変質速度測定システムを構築しようと計画しています。

今後、研究が実を結び大気エアロゾル粒子の化学反応機構が十分に理解されることで、人間活動が大気環境へ及ぼす影響のコントロールに役立つことができればよいと思っております。更に、現時点ではまったくの絵空事です。大気エアロゾル粒子に関わる化学反応を利用した降雨や日射といった大気環境の“設計”にチャレンジする日が来ることも夢見て日々研究に励んでいます。

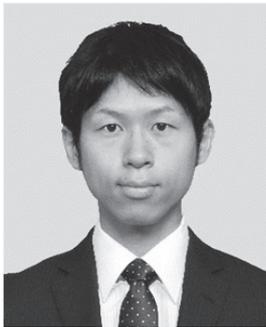
学生の皆さんへ

機械やコンピュータの発達により単純作業の価値が下がり、今後ますます創造性を持った付加価値を付ける事の出来る人材が望まれてきます。創造性を発揮するには深い専門性と“遊び心”を内包した独自性が必要になります。総合人間学部には第一線でご活躍されている幅広い研究分野の先生方が所属されていますので、これから社会の第一線でご活躍される学生の皆さんには、そういった先生方のユニークな雰囲気を感じること、創造力を大いに育てて欲しいと思います。

(さかもと ようすけ)

新任のご挨拶と教育・研究への意気込み

山本 旭 (自然科学系)



2015年7月16日付けで、総合人間学部自然科学系(大学院人間・環境学研究科 相関環境学専攻 物質相関論講座)に助教として着任いたしました。私は京都大学工学部の出身で、学生時代は一貫して自動車排ガス浄化

用の光触媒に関する研究に取り組み、工学研究科で博士号を取得しました。学部4年生で桂キャンパスに移動しましたので、5年と数カ月ぶりに吉田キャンパスに戻って来たことになります。今年で京都に住み始めて11年目、京都が地元富山に次ぐ第2の故郷と感じています。

学部時代は体育会ヨット部に所属し、琵琶湖の上で浮かんでおりました。ヨット競技は非常に奥が深く学部の4年間をその追求に捧げましたが、ヨットを理解したと言える状態には至りませんでした。部活動の引退後、研究室配属を機に真剣に研究に取り組もうと一念発起し、幸い素晴らしい先生方や研究テーマと巡りあい、研究の世界に飛び込みました。この世界も大変に奥が深く、4年間という制約もないので、思いのゆくまで追求すると共に、しっかりとした成果を残して社会に還元できればと思っています。

私の専門分野は触媒化学で、主に光触媒や自動車触媒などの固体触媒材料の研究をしています。固体の表面では通常は起こらない化学反応が起こります。例えば、自動車に搭載されている触媒は排ガス中の窒素酸化物や一酸化炭素、燃料の燃え残りの炭化水素などの環境や人体に悪影響を及ぼすガスたちを同時に除去しています。それらのガスたちが固体表面に勝手にくっついて反応し、無害なガスになっているのです。実際に自動車の触媒を見る機会はあまりないかもしれませんが、我々

の身の回りの生活環境や地球環境の保全という観点で触媒技術は必要不可欠なものです。

固体触媒材料の研究は、触媒材料自体の開発やそれを利用した新規な反応開拓、分光学的な手法を用いた反応経路の解析など幅広く行われています。そのなかで私は、固体表面で起きる反応や現象に興味を持って研究を進めています。これまでは分光学的手法と反応解析により固体表面で起きる現象を捉えることに注力してきました。今後は分析・解析のノウハウを活かして、固体表面で起きる新規な現象を探しつつ、その表面現象を利用して新しい材料をデザインし触媒反応へ応用することを目指して研究に取り組んでいければと思っています。

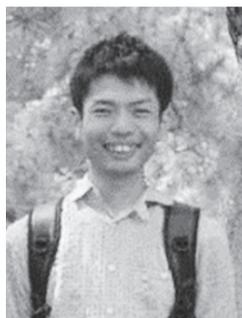
7月に着任して、まだ日は浅いのですが、既に講義や学生実験を担当させていただき、学部時代に自分が受けていた講義をする側になりました。まだまだ経験不足で不慣れな点も多いかと思いますが、諸先生方にアドバイスを賜り、また自分でも工夫を凝らし、ここでしかできない教育を意識して講義に望む所存であります。

最後に、総合人間学部の学生諸氏にメッセージを送ります。私の場合は進路を決めるターニングポイントは大学院時代にありましたが、そのタイミングは人それぞれだと思いますし、私個人の考えでは自分の専門性を決める時期はある程度早いほうがよいと思っています。総合人間学部の学生には、様々な研究者・学問領域を有するこの環境を最大限に活かして、興味をもてる講義や分野を1つと言わず積極的に見つけに行っていきたいと思っています。そんな中で、ここだと思う出会いがあれば思い切って飛び込んでみるのが良いのではないのでしょうか。

(やまもと あきら)

研究のきっかけを得た京大生時代

阪口 翔太 (自然科学系)



2015年11月1日付で総合人間学部・自然科学系(人間・環境学研究科 相関環境学専攻 生物環境動態論)に助教として着任しました。大学・大学院生時代を本学で過

しましたので、慣れ親しんだキャンパスに戻って来られたことを嬉しく思っています。

専門は、植物系統地理・植物の生態的種分化に関する研究です。面白い生態や分布をもった植物を野外で調査したり、遺伝マーカーを用いて過去の集団動態を推定したりしています。過去の環境変動に合わせて、植物は分布域を広げることもあれば、個体数を減らして特定の場所にだけ取り残されることもあります。そうした歴史的な集団の挙動は、現生集団のゲノムに遺伝的多型として残されていますから、それを統計モデルに当てはめて解析することでパラメータ(過去の個体数や集団が分かれた時間など)を推定できます。こうした方法を使えば、例えば化石記録が残らない乾燥地であっても、約2万年前の氷河期に樹木の個体数がどう変化したのかを知る手掛かりが得られます。こうした植物集団の動態を辿る研究では、自然史のロマンを感じずにはられません。最近、高校生時代からの山草趣味を活かして、集団遺伝に栽培実験を組み合わせた研究も始めました。とくに興味を持っているテーマは、蛇紋岩地における森林植物の適応です。蛇紋岩土壌は貧栄養で重金属を多く含み、乾燥しやすいといった過酷な環

境なので、植物は何らかの適応を遂げなければ生育しづらい場所です。こうした強烈な自然選択が働く蛇紋岩地に侵入した植物は、通常の型の植物に比べて極端に葉が小型化していたり、1か月以上も早く花を咲かせたりします。実際に屋内に種子を持ち込んで栽培を行っても、そうした蛇紋岩形質は遺伝的に固定されていて、隣り合う林地型とは明瞭に分化していることが分かってきました。単純な栽培実験ではありますが、野外で働いている自然選択を実感できてわくわくします。

私は高校生時代から植物の多様性に魅せられてきましたが、それを学問として追究したいと思うようになったのは大学に進学してからのことです。入学当時は、植物が好きという気持ちだけで、山を眺めても「青々しているなあ」くらいの印象しか持ちませんでした。それだけ知識も浅く、何をどのように見ればよいのかも分からなかったのです。それが、生態学の講義で体が揺さぶられるような知的体験をし、野外に出て研究者の解釈を聞く中で、一面の緑でしかなかったものが解像され、個々の植物の顔や生き様が見えるようになってきました。この面白さを知ってしまったからは、就職活動もそっちのけで「研究をやりたい」という希望が膨らんでいきました。大学生時代は感受性が強く、その時に感じたことが人生の方向性を決めることもあります。また、自分の責任のもとで自由に時間を使って行動できる時期ですので、自分の心に響く何かがあれば貪欲に学ぶことをお勧めしたいと思います。

(さかぐち しょうた)

I	uman	S	編集後記 ◆『総合人間学部広報』第55号をお届けいたします。 今号は、特集「総人・人環学生プロジェクト2014『きく』」、 および11名の新任の先生方からのメッセージを掲載しまし た。学生・教員それぞれの立場からの、総人・人環という「場」に対するフレッシュな思いに満ちた 言葉の数々を読んでいると、私自身が15年前にここに着任した時の気持ちを思い出させられました。 大学を取り巻く環境はその頃とは激変しましたが、これからもその初心を忘れることなく、若い世代 の先生方や学生諸君にリレーしていければ、と思っています。
ntegrated	H	tudies	

(J・Y)

人間・環境学研究科
総合人間学部 広報委員会